



絵本は心の栄養

先日の運動会では、大勢の方にご観覧いただきありがとうございました。いかがでしたか。閉会式の際にも申しましたが、今回は特に教職員や園児たちの創意工夫が大いに発揮されました。前例、また既成のものにとらわれず、自分たちで創り上げた運動会でした。演技においても、園児たちが話し合っ動きやポーズを決めた部分が随所に見られ、ある部分では目線も指先もびしっとし、ある部分では笑顔でのびのびと表現していました。また、競技でも3チームによる得点争いは、リーダーを始めとしたチームの仲間意識が見られ、すばらしい運動会となりました。

さて、10月は偉大な絵本作家が2名他界されました。「ぐりとぐら」でおなじみの中川李枝子氏と、私も昔何度も子どもに読まされていた「ねないこだれだ」のせなけいこ氏です。中川氏は自叙伝「絵本と私」(福音館書店)でこのようなことを書かれたことがあります。

絵本でも物語の本でも、お母さん(あるいはお父さん)が子どもに「読み聞かせる」というのは、どこかお説教くさく、押しつけがましい感じがしてなりません。お母さん自身が楽しみながら、子どもといっしょに絵本を見る、そして読む——それでいいと思います。



「絵本は心の栄養」とよく言われます。では、どのような栄養素があるのでしょうか。

- 1 子どもの心の安定が図られます。子どもは同じ絵本を何度も読んでくれとせがんでくれます。なぜでしょう。おそらく、そのお話の展開のおもしろさやスリル、言葉の心地よさを楽しんでいるのかもしれません。「いないいないばあ」(松谷みよ子)は、わかっているのになぜか次のページへの期待感が沸いてきます。そして予想通りに「ばあ」と出てきて、期待を決して裏切らないことが心の安定をもたらしてくれます。さらに、絵本をお母さん(お父さん)と二人きりで読む時間と空間は、自分がお母さん(お父さん)を独り占めしていると実感できる至福のひとときなのです。
- 2 感情が豊かになります。現実では経験できない感情を経験できるのが、本の世界です。子どもは、現実の世界とお話の世界を自由に行き来することができる世界に生きています。先述の「ねないこだれだ」や「三びきのやぎのがらがらどん」(マーシャ・ブラウン)などちょっと怖いお話には何度読んでやっても怖がります。でもまた読んでくれとせがみます。なぜか。お母さん(お父さん)と一緒に安心できるからです。そばで一緒に怖がり、一緒に喜んでくれるから怖さ半分、喜び2倍になるのだと思います。絵本を通して親子で共感し、豊かな感情が育まれます。
- 3 絵本の楽しみ方の一つに挿絵があります。中には、「おおきなかぶ」の挿絵を描いた佐藤忠良氏や「ふしぎな絵」の安野光雅氏のような世界的な彫刻家や画家の作品もあります。幼児期はあらゆる感性を育む時期です。ですから、幼児期から本物の芸術に出会うことはとても大切です。「三びきの〜」の作者マーシャ・ブラウン氏は、「絵本の絵は子どもが人生で最初に出会う芸術作品のひとつ。」と言っておられました。子どもは、絵本を通じて絵を見る目が格段肥えてきます。
- 4 絵本は言葉を豊かにします。幼児期は耳から日本語を覚えていきます。「花さき山」(斎藤隆介)、「かにむかし」(木下順二)など、標準語、方言を問わず、子どもは絵本の文章を耳で聞いて楽しめます。「どろんこハリー」(ジョン・ジョン)では、「くろいぶちのある しろいいぬなのに、しろいぶちのある くろいいぬ」といった表現も3歳前から理解し、その表現の面白さを聞きながら体感します。絵本で様々な言葉を体験することで、実感を伴いながら言葉が豊かになっていきます。

「読書の秋」。秋の夜長は虫の声を聞きながら、どうぞお子様を絵本の世界へいざなってあげてください。さて今年はどうな絵本で子どもといっしょに楽しみましょうか? (園長 寺本 明生)